

私たちの住む寺田縄で、昔から語り継がれてきたお話です

＜ 船木 達さんから聞きました ＞

一つ目小僧と道祖神まつり

父母は、明治時代、寺田縄に生まれ、育ちました
私が小学校に入った6・7歳のころ、時代は昭和です
寺田縄に言い伝わってきた昔話を毎晩、話してくれました
幼い私は、この昔話を本当のことと信じきって、聞き耳を立てていました

その中から、今日は「一つ目小僧と道祖神まつり」の話を聞かせましょう

まずは「一つ目小僧」のお話です

寺田縄でお米の収穫がすみ、秋も終わり、あたりに冷たい風が吹き渡るころ
12月8日の夕闇、「一つ目小僧」がやってきます
毎年 毎年 やってきます

その姿は 大きな目が一つ、口も大きく、そのうえ足は一本
それはそれは、とても恐ろしいお化けが、寺田縄にあらわれます。

「一つ目小僧」は一本足ではねながら、家々の周りをめぐります
大きな目をかっと開き、家の中をのぞき込み、子どもを探します
最初の家の子どもには赤痢、二番目の子どもには疫痢、三番目の子どもには天然痘を、と、手にした帳面に子どもの名前と病名を書き込みます

次の年の春から夏にかけて、帳面に書かれた子どもたちは、「一つ目小僧」の魔力のため、次々と重い病気にかかってしまいました

「一つ目小僧」は、子どもたちを病気にするためにやって来るのです

「一つ目小僧」が家に近づかないように、子どもが重い病気にかからないようにと、子どものいる家の軒先や玄関先に目籠をつるしました

目籠は、竹で目を粗く編んだ、もの入れ用の籠です、目がたくさんある籠です

「一つ目小僧」の目は一つ、目籠の目は沢山です

『ヤーイ 一つ目小僧、俺たち寺田縄の子どもには、こんな沢山の目があるぞ、お前の目はたった一つだろ・・・』恐ろしさを払うように大声で叫びました

目かごは、私の家にもかけられました

どんなに子どもたちが叫んでも「一つ目小僧」はしたたかです

手帳に子どもたちの名前をかき続けました

12月8日も暮れかかり、「一つ目小僧」は手帳を村の入り口の道祖神様のお社に預け、春になって再び来ることを告げ、ふと、姿を消しました

ところが、手帳が預けられた道祖神様のお社は、ぱっと火の手が上がり、なぜか燃えつきてしまいました

1月14日の夜更けのことでした

寺田縄の子どもたちの名前が書かれた手帳も燃えてしまいました

「一つ目小僧」の手帳は燃えて無くなってしまいました

道祖神様の火災以降、寺田縄の子どもは、重い病気にかからなくなった、ということです

次は「道祖神まつり」のお話です

道祖神様のおまつりは「一つ目小僧」のお話に続きます

道祖神様は子どもたちが重い病気にかからならないようにと、身をもって守ってくれたのでしょ

このことがあってから、子どもたちは村の家々を回り、すす払いの竹や笹、お正月のお飾りを集め、お仮屋を立て、道祖神様に納めました

それは、1月14日のことです

道祖神様には御神酒、だんご、みかん、りんごなどを供えて、おまつりをしました

お仮屋には、子供たちが陣取り『赤痢も軽く、疫痢も軽く、天然痘も軽く、悪魔っばらい、悪魔っばらい』と、口々に声の限り唱えました

道行く大人からお賽銭を貰い、御神酒を口にしてもらいました

日が暮れかかるころ、集められた竹や笹、お正月のお飾りに火がはなたれ、お焚き上げされました

所によっては、道祖神様もお焚き上げられたそうです

このおまつりは、自らが燃えることで子どもたちを守った道祖神様への感謝のあらわれでした

お焚き上げが終わり、夜がそこまで来る頃になると、きちんと挨拶をして家に入るように諭され、先輩の家に呼ばれます。先輩を囲み歌を唄ったり、今日の楽しかった思い出を語り合ったりしました。

先輩たちは、寺田縄の主だった家を周り、子ども芝居のような芸を見せたりしたこともあったそうです

昼間のまつりに合わせ、夜まで遊べる一日、楽しい思い出が満載でした

この日、参加できたのは、男子のみで女人禁制のまつりでした

道祖神様に納められた品々は皆で分けます

もちろん、集まったお賽銭も同じです、学年別に、高学年には多く分けられました

学校の授業は半日、担任の先生の『火事出すな、皆で仲良くしろ、怪我するな』の注意を背に学校を飛び出しました

親からは何も言われることのない、無礼講、まったく自由な子どもの日でした